③「釜石てっぱんマップ」を手に街を歩く

平松 伸一郎

「釜石てっぱんマップ」は２０１４年３月に初版刊行した釜石市街のまち歩き地図である。“現在”の情報だけでなく、「ここに〇〇があった」「ここで△△をした」といった“まちの記憶”を積極的に盛り込んでいる点が特長の一つだ。これには、津波により多くの更地が出現し、地元の人間ですら震災前の姿を忘れ始めていたことや、震災前には既に衰退の道を辿っていた釜石にとって、全盛の時代やまだまだ元気だった頃の様子を忘れないでほしいとの思いが背景にあった。

その「てっぱんマップ」を携えてのまち歩きは、釜石駅前の大島高任像前からスタートした。江戸末期の安政時代に、この地で大島高任がわが国で初めて洋式高炉による製鉄に成功して以来、「鉄のまち」として歩んできた釜石のことを、駅前に製鉄所がそびえる風景とともに紹介。また、銅像脇にある「釜石小学校校歌」の碑についてもお話した。これは釜石ゆかりの作家・井上ひさしの作詞によるもので、校歌の定番とも言えるその土地の名景も校名もいっさい歌われず、ただただ、いきいきとまっすぐ生きる上で大切な教えが明朗に綴られている。発災後、被災市街地の高台にあった同校はすぐに避難所となると、毎朝この校歌が歌われ、みなさんの支えとなった逸話も紹介した。

駅前を後にして、かつて橋上市場があった大渡橋を渡り、市民が“まち”と呼ぶ中心市街地に入った。ここで体感していただきたかったのは、釜石の地形的な特徴と言える平地の狭さと海との距離感である。釜石のまちは、中近世の頃から栄えた他の岩手沿岸の市部に比べて平地が少ない。逆に言えば、避難する高台が近いとも言える。このような話とともに、発災時には多くの市民が石段を上った「薬師公園」へと向かった。

あいにく当日は小雨が時折降る天候であったので、市街地を見渡す中腹の公園までは上がらずに、入口近くにある石碑の紹介にとどめた。碑には「田舎なれども釜石薬師 出船入船目の下に」と詠まれ、今では建物に囲まれて海の気配も感じられないが、かつてはここから賑やかな海が見えていたのである。

今回は災害文化研究会のツアーながら、「てっぱんマップ」らしい路上観察的“小ネタ”もご紹介したいと思い、釜石の都市インフラが早くから整備されていることが窺える、「瓦斯」と右から書かれた“マンホールの蓋”も箸休め的に見ていただいた。

やはり高台にある寺院「仙寿院」の下では、津波発生時における速やかな高台避難を啓発する目的で毎年２月に開催されている「韋駄天競争」のことを紹介して、この日のゴールである「避難道路」へ。市役所本庁前から山の中腹に海岸地区まで整備されている「避難道路」から、ようやく海を望むことができた。震災当日は、ここから津波襲来の様子が全国に伝えられた。みなさんには、目の前に広がるこの日の静かな海から津波のことをしばし想像していただいた。

短い時間での拙い案内ではあったが、まち歩きで感じていただいたことの中から何か一つでも、災害文化の視点から抽出していただけたならば幸いである。

てっぱんマップを手に説明